

思い出草

和田陽平

幼い頃の記憶は、忘却の暗闇のなかに、微かに点々と光る螢火のように頼りない。

ハレー彗星

明治四十三年の五月、ハレー彗星が現れた時には、地球が尾のなかに入ることになり、人心不安に乗じて、災難除けのこわ飯を売り出して儲けた人が、大阪には、あったそうである。

私は家の人達と一緒に、庭の築山の縁台に腰掛けて、大きなほうき星を眺めた。それは遙かな西の夜空、黒い丹沢の山並の上に、白い尾を長く横に引いていた。

しかし、その時の私は、まだ三歳に満たない。これは恐らく、後年、大人達から聞いた話が、いつの間にか、自分の記憶のようになってしまったのだろう。

ジクムント・フロイトは幼時、弟ユリウスが死ねばいいと思った。ところが、ユリウスは彼が望んだ通り、生後僅か八ヶ月で死んだ。フロイト後年の神経発作の原因は、ここにあるという。だが、ユリウスが死んだ時、フロイトは、まだ一歳七ヶ月。そんな赤ん坊が、弟が死ねばいいなどと、果して考えるかどうか。また、その心の傷が永く無意識裡に残るなどという事があり得るだろうか。私には全く意想外だが、抜群な頭脳の持主には、そのようなことがあるのかも知れない。

俣の災難

人力車は明治二年に発明されたものだそうだが、私の子供の頃は、全く普通の乗物であった。

ある雨の夜、母と私は、招かれて、よその家に行くことになった。俣に乗った母は、私を膝にのせ、俣屋さんは梶棒をあげて、ゆるい坂道を二三歩走り出した途端に、いきなり滑って尻餅をついた。突然、俣が止り、急に梶棒がさがり、しかも下り坂のこと、母は私を膝にのせたまま放り出され、車夫の頭を飛び越えて、泥道に落っこちた。幸、着物が泥んこになっただけだった。

再び乗った時には、「坊ちゃん、今度は大丈夫ですよ」と俣屋さんに言われたような気がするが、本当に今度は何事もなく走った。幌についた小さいセルロイド張りの窓に、町の軒燈のあたりが、次々に行き過ぎた。雨に滲んだ灯のまわりで、セルロイドの細かい疵が光の暈を作った。

後年、田舎道を自動車に乗せて貰い、カーヴに差し掛かった処で、ハンドルの柄がボッキリと折れ——こんな珍しいこともある——車は真一文字に一問ほど下の田圃に勢よく飛び込

んだ。この時に、先ず頭に浮んだのは、幼時の俣の災難であった。

鰻頭

お江戸日本橋七つ立にはじまる東海道上上りの唄の第三節
六郷あたりで川崎の、まんねんや。

鶴と亀とのよね鰻頭、

こちゃ神奈川いそいで保土ヶ谷へ。

こちゃえ、こちゃえ。

私の子供の頃の聞き覚えでは、「六郷わたれば川崎の」であって、六郷の渡しを渡ったところに、鰻頭屋があったものかと思っていた。

だが、たまたま見た天保七年版の『江戸名所図会』の鶴見橋の絵には「橋より此方に米鰻頭を売る家多く此地の名産とす。鶴屋といへるもの尤も旧く、慶長の頃より相続するといへり」とあって、橋より此方とは、絵から見ると、鶴見川の川崎側の方のようである。

試みに広辞苑で「よね鰻頭」の項を見ると、江戸浅草金竜山の麓で売っていた鰻頭、と出ていたりして、麓とは浅草寺

の門前地のことかどうか、私にはよく分らないが、とにかく、よね饅頭というのは、どうも方々にあつたらしい。私の子供の頃には、今の鶴見の花月園の入口のあたりに、よね饅頭の店があり、それは昔の道中唄や名所図会のそれとは縁のないものであつたかも知れないが、白と茶色の、珍しい紡錘形の饅頭であつた。

私の生家は横浜市内ではあつたが、その頃は、まだ郊外の俵をとどめており、坂の上には小さな甘酒茶屋があつたりして、そこいらに田舎の饅頭屋があつた。今はバス停留場の名だけに残る「藤棚」には、大きな藤棚の下に床几を置いた、名物藤棚饅頭があり、また、私の家の近所、伊勢町の布袋饅頭は布袋様の姿を焼印で押し、餡は赤砂糖の味がした。

私は家のうしろの桃の木に登るのが好きだつた。一番高い枝に跨つて、おやつやの布袋饅頭を懐から出して食べながら、遠く遙かな保土ヶ谷の、森、家、畑のつらなる空を見渡して、孫悟空の筋斗雲十万八千里、空を飛び翔る思いをするのであつた。誰であつたか、石楠派の俳人の句に

柿の木に登りしは風の昔なり

空を渡る颯々の風は昔も今も変りはないが、私にはもう、空を翔ぶすべもない。

浅草花屋敷

宇野浩二の『苦の世界』には、思いに屈した三人の大的男が、浅草花屋敷で、ドンガラガッカ・ブーブの楽隊の音につれて廻るメリー・ゴー・ラウンドに乗って落馬したり、頼にむやみ矢鱈に鱈をやる情景が描かれているが、これは宇野浩二大正九年の作であつて、私の記憶に残る花屋敷は、それよりは古い。

『苦の世界』にも載っている操人形の桃太郎は私も見たが

オニガシマラバ、ウタントテ

イサンデイエラ、デカケタリ

幟を差した勇ましい桃太郎が、足を頭よりも高く、ピンピンとあげて出発する光景に、ドッと笑つた記憶しかない。

正直な森の番人が、悪漢に鉄砲で撃たれ、子供達が取り纏つて泣くという、西洋の活動写真を観たのは、花屋敷であつたかどうか、それも定かではないが、私は現に父と手をつないでいながら、自分の父が殺されたような錯覚に陥り、わつと泣き出した。どうやら私は大変な泣き虫であつたらしい。

牛乳屋の火事

家の近くの青木牛乳店には、小さな牧場があり、数頭のホルスタイン種の牛が、黒土の上に寝そべったり、佇んだりしていた。柵の外の南向きの斜面は、群がり咲くイヌノフグリ
の空色の小さい花が、春の日を受けて揺れていた。私は兄や姉のあとについて、よくその辺で遊んだ。

ある晩、皆で一緒に汁粉を食べている最中、突然、揺半の半鐘が鳴り出した。家の下の往来を慌しく走る足音がする。火事だ、という声も聞える。「こりゃ、近いぞ」と、父は立ち上った。私は幼いので、匙で汁粉を食べていたが、それを放り出して、雨戸を開けようとすると父のそばに駆け寄った。戸を開けた途端、真っ赤に焼けた空一面に、金粉を撒いたように舞い上る火の粉に仰天した私は、父にしがみついた。寒い季節でもないのに、歯がガチガチ鳴ってとまらない。

「牛乳屋だ。青木が火事だ。」

火勢が静まって、茶の間にもどった時には、放り出した匙に、乾いた餡がこびりついてた。

それにしても、匙についた乾いた汁粉などが、どうして記

憶に残るのだろうか。

フォース・ジュライ

七月四日、米国の独立祭の夜、横浜の港で花火が打上げられた。その頃、海岸通りは、じかに海に接しており、ずっと先の、山下橋のすぐ近くに、煉瓦建てのグラランド・ホテルがあった。

私達は、ホテルの前の、海際の石崖に腰掛けて花火を待った。足もとの崖に、ひたひたと寄せる波の、微かな音は、辺りの人達のざわめきに消されて聞えない。暗い港に、解が時々汽笛を鳴らしては、忙しく行きかった。

空も港も夜ははれて

月に数ます船のかげ

はしけのかよいにぎやかに

よせくる波もこがねなり

(明治二十九年・教育唱歌)

月は無かったが、遠く、防波堤の突端の、二つの燈台の灯は、たがいに海を照らし、更に遙か遠く、海を隔てた神奈川あたりの街の灯は、横一筋の小さな点になって瞬いた。

私達のうしろのグラランド・ホテルの二階では、祝宴が始まったらしく、華やかな夜会服の西洋婦人が見え隠れした。

突然、火花は息を継ぐひまもなく、矢継早に打ち上げられ、赤・白・青の光は、見上げる空一面に散らばって、港の海も、燃えるように照り映えた。仕掛け火花のナイヤガラ瀑布は白銀の光の滝を海に注ぎ込んで、私達の顔まで真っ白に照した。

私は、この日の情景を、忘れることは出来ない。

大正十二年九月一日、グラランド・ホテルは大地震で瓦礫となった。中に居た人達は全部死んだ。

海のあなたにうすがすむ

汽笛一声新橋を、に始まる鉄道唱歌は、一番の新橋から、六十六番神戸に終る長丁場で、これを全部、そらで歌える人は当時でも、殆ど居なかった。ところが後年、宴会の席で必ず終りまで歌う人があって、聞く人は誰も、十三番「いでてはくぶるトンネルの、前後は山北小山駅」のあたりまで来ると、沼津で急行に乗り換えてくれないかなと、ひそかに思う

のであった。

窓より近く品川の 台場も見えて波白く

海のあなたにうすがすむ 山は上総か房州か

当時、品川の辺は、汽車が波打際を走り、御台場の遙か彼方に千葉の山々が青く霞んで見えた。私は、この歌の「うすがすむ」という意味がよく分らず、猿蟹合戦で向う鉢巻勇ましく、屋根から飛び下りて、悪い猿を押え付けた臼はあの山に住んでいるのかと思ったりした。

× × ×

近頃、小学校の先生から聞いた話に、

子供達の作った劇の、浦島太郎が竜宮から故里の浜に帰った場面で、大きな蟹が現れた。

帰って見ればこは如何に

もと居た家も村もなく

路に行きあう人々は

顔も知らない者はばかり

唄の通り、帰って見れば「怖い蟹」が出て来た訳である。今も、私と似たような子供が居るものとみえる。

(明星大学)